〔論文〕

鋳物職人の同族的系譜関係
――岩手県奥州市における水沢鋳物の事例――

高木 俊之*

1．研究の目的と意義
2．岩手県奥州市（旧水沢市域）と製造業の概要
3．南部鉄瓶の製造工程と技術の修得
4．水沢鋳物業における職人の系譜関係
5．まとめと課題

1．研究の目的と意義

本研究の目的は，岩手県における水沢鋳物の古老である千田泰司氏が作成した師弟関係を示す系譜を手がかりに，わが国の同族団研究にこれまで顧みられてこなかった職人の系譜関係を加えることにある。本来論ずるべき社会学者がこのテーマを研究してこなかった理由は，産業社会学や労働社会学は地場産業や伝統産業にあまり関心を持たず，村落社会学は中野卓の研究を除きその知見の第二次産業への応用を，鉱山の「友子」以外に試みなかったからである。その証左は，これまで水沢鋳物を調査したのは，後述するように産業の地域的集積に関心を持った地理学者だけであることから窺える。

同族団の定義と研究史についても後述することにして，まず現地水沢の雰囲気を描写することにする。現在，東北新幹線の水沢江刺駅前には，写真①の「ジャンボ鉄瓶」と称される巨大な南部鉄瓶が設置されている。これは，南部鉄瓶や南部鉄器と呼ばれる鋳物製品が，この地域の代表的製品として親しまれていることを示す。そして，駅から歩を北上川の方向に進めると，ほどなく写真②③に見られ，その屋根に後述する「キュポラ」と呼ばれる炉の煙突を有する鋳物工場が目に入ってくる。このあたりに来ると工場の横に銑鉄が積み上げられているのを見かけるし，焼けた金属の匂いがまちの中を漂っていることも珍しくない。その近くには，写真④の伝統工芸士[1] に認定された職人がいる工場や，家内工場のため正面からすぐには判別しにくいが鋳物に関連する小規模な工場が多数存する。これは現在の風景であって，わが国の昭和30年代の下町の風景ではない。

投稿日2018年９月26日　　受理日2018年11月28日
＊教養学部人間環境学科社会環境課程准教授

写真①水沢江刺駅前のジャンボ鉄瓶
資料：著者撮影（2013年３月29日）

写真②及源鋳造
資料：著者撮影（2001年10月11日）

写真③屋根にキュポラがある水田鋳造所
資料：著者撮影（2013年３月29日）

写真④伝統工芸士が鉄瓶を製作する成龍堂
資料：著者撮影（2013年３月29日）

本論文で取り上げる岩手県奥州市における旧水沢市羽田町[2]とは，このように現在でも鋳物工場が住宅地に混在している地域である。この地の鋳物業については，かつて中本たか子が『南部鐵瓶工』に，売価や材料費が上がっても卸値は安いままで，かつ借金を抱えた鋳物工場の親方達が，地元の徳望家で蠶種製造業のＳ氏[3]を頼りに，原材料の仕入れと販売を共同で行うために「岩手南部鋳造工業組合」設立に至る様子を小説として描き出したことがある（中本，1938）。その他にも，これまで池田雅美，初沢敏生，山本俊一郎といった地理学者が，この地を訪れて産地の形成，製品の転換，流通構造の変化について研究にまとめている（池田，1949，1978；初沢，2002；山本，2006）。そして，本研究のテーマである鋳物職人の師弟系譜については，郷土史研究家の小林晋一が1965年から調査を重ねた非売品の『水沢鋳物発達史考』（小林，1971b：資料篇）に掲載したが，それについては前記の山本俊一郎の研究の他には社会学専攻である桑原敬一の未公刊修士論文（桑原，1998）にわずかに触れられているに過ぎず，同族団との関連は論じられていない。

本研究は，工業におけるいわば同族的な系譜関係について新たな意味を付け加えることを第一のテーマとする。後述するように，わが国の村落における同族団の存立基盤は，第二次世界大戦後の農地改革によって弱まったため，中野卓は，「同族は歴史社会学的研究の対象となりつつある」（中野，［1974］1995: 300）とした。中野の今後，村落において新たな同族的関係は

生み出されないだろうという見解に異論はないが，本論に見られるような伝統的職人の系譜は，近年に至るまで脈々と受け継がれているにもかかわらず，社会学者が同族団を過去のテーマとみなしているのか，注目を集めているテーマとは考えられない。それならば，社会学における同族団研究を村落だけでなく伝統産業の職人へ応用して，その持つ意味の相違を考えることには，これまでにない素朴な研究上の発見があると考える。そこで次節から岩手県旧水沢市における鋳物業の成り立ちについて述べることにする。

2．岩手県奥州市（旧水沢市域）と製造業の概要

岩本由輝が指摘するように南部鉄器の産地には盛岡地区と水沢地区という二つの中心がある。近世において盛岡地区は南部氏の，水沢地区は伊達氏の保護と統制のもと，独自の発展をしてきているが，現在はともに南部鉄器を称している（岩本，2002: 123-124）。盛岡鋳物と水沢鋳物はともに岩手県内の地場産業に位置づけられており，後述する伝統工芸士の及川鉄氏によると南部鉄瓶の特徴は「内側に酸化被膜をかけて，完全に金気止めをする技法」（野添，1986: 191）にある。しかし，芸術性を持つ盛岡と日用品に力を入れる水沢とではその発展のあり方は自ずと異なっている。その点について，二つの産地は別々の鋳物文化圏を形成して，お互いが切磋琢磨して一つの流れになって南部鉄器を支えているとされる（『日本経済新聞』2000年７月26日夕刊）。

盛岡鋳物と水沢鋳物は，伝統産業であるだけにその両方に師弟の系譜が存在している。しかし，盛岡鋳物については御釜屋と呼ばれて10代続く小泉系や，27代続く有坂系に見られるように（南部鉄器協同組合編，1990: 140; 143），より直系を重視した系譜と見ることができる。それに対して，水沢鋳物は血縁・非血縁も含めた多数の徒弟を擁した系譜が残っているが，そこに学問的考察は加えられていない。本研究を水沢鋳物に焦点を絞る理由はそこにある。次に旧水沢市および水沢鋳物の概況について述べることとする。

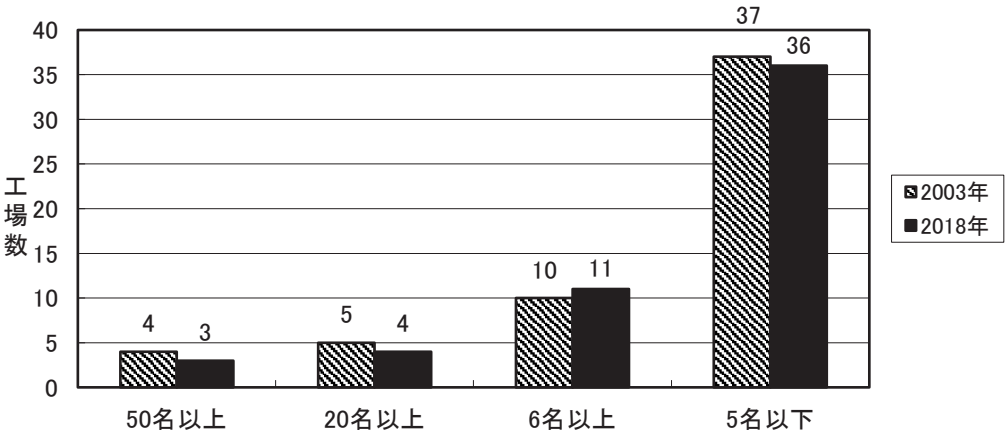


図１　水沢鋳物工業協同組合加入の規模別工場数
資料：水沢鋳物工業協同組合の HP「水沢鋳物の売り上げ状況」「従業員状況」[4] から作成

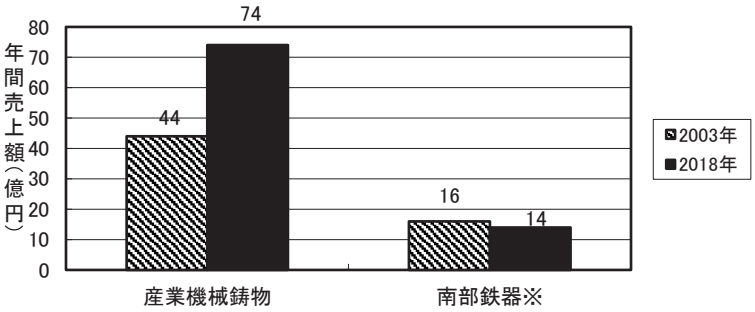


図２　水沢鋳物の売り上げ状況
資料：水沢鋳物工業協同組合の HP「水沢鋳物の売り上げ状況」「従業員状況」[5] から作成。※「南部鉄器」は2003年の統計では「工芸鉄器（エクステリアを含む）」と分類されていた。

まず図１に見られるように，水沢鋳物の製造を担う工場の規模は，５名以下の小規模な工場がその多くを占めている。その総数は，リーマンショックを挟んだこの15年間で，56社から２社減っただけの54社であり，その数はほとんど変わっていないし，従業員数も571人から569人とほぼ同数である[6]。ところが，図２に見られるように2003年の水沢鋳物工業協同組合加盟企業の年間売上額は産業機械鋳物44億円だったのが，15年後の2018年には74億円と大幅に増加している。

これは2006年頃から「東北各県，電機から車にシフト」（『日本経済新聞』2006年３月13日，朝刊）といわれはじめたように，岩手県では金ヶ崎町にトヨタグループの関東自動車工業岩手工場が立地したことから，自動車用鋳物部品の受注が増加したと考えられる。こうした動きは東日本大震災後の2012年に，関東自動車工業岩手工場などが合併してつくる「トヨタ自動車東日本」によって東北を中部，九州に続く国内第３の拠点にするということをトヨタ自動車が発表（『朝日新聞』2012年５月19日朝刊）したためにさらに進むことが考えられる。こうしたことから，鋳物産業自体は決して衰退産業ではないことがわかる。

この間に，水沢鋳物協同組合加盟企業で目立った動きは2005年８月に，創業が1912年，従業員33名と歴史の古い中堅企業と見られる及勘が，自動車部品部門は海外企業と競合，マンホールのふたなどの環境鋳物が公共事業の減少で低迷し，破産手続き入ったこと（『毎日新聞』2005年８月12日岩

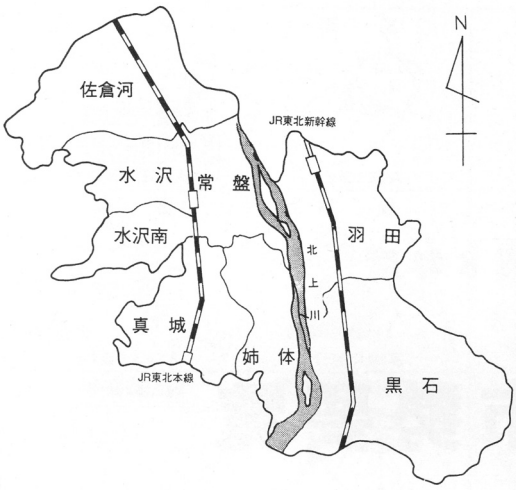


図３　旧水沢市内の行政区を示す地図
資料：水沢市企画課編（1996: 1）

手地方版）。また及源鋳造は，上海の茶販売会社「上海大可堂」からプーアル茶を美味しく入れるためにお湯の出方にこだわった鉄瓶を受注して，高い評価を得たために年間，1,000個台での注文があったこと（『日本経済新聞』2010年６月16日地方経済面）などがあげられる。そこで，再び図２をみると，南部鉄瓶を含む工芸鉄器の売上額は16億円だったのが14億円になっていることがわかる。やや減少したが一定の需要を維持していると見ることができる。

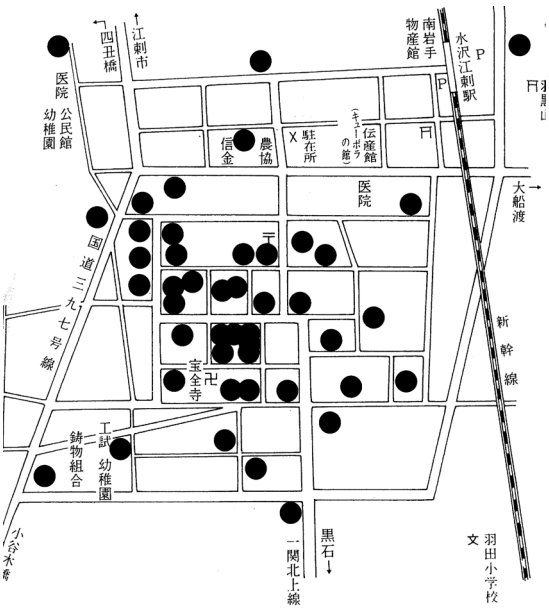


図４　旧水沢市羽田地区の鋳物協同組合員工場の分布
資料：水沢市史編纂委員会編（1990: 656）の地図に工場分布をプロットして作成

次に，旧水沢市および鋳物製造の工場が集中している羽田地区について述べる。2006年２月20日に５市町村が合併して岩手県内の人口第２位となる約13万人を擁する奥州市が誕生した。それ以前の2004年の旧水沢市内の人口総数は，60,540人であった[7]。その旧水沢市は図３に見られるように行政上８つの地区に分けられていた。市名である水沢市に冠されている水沢町は，羽田地区と北上川を挟んだ対岸にある。

図４に示したように，約50の鋳物工場が集中しているこの一帯は，1954年までは江刺郡羽田村の田茂山という集落であった。水沢市制によって，羽田村が羽田町になった。よって小林晋一のいうように，水沢鋳物もかつては羽田鋳物，さらに古くは田茂山鋳物と呼ばれていたのである（小林，1982: 73）。

その羽田地区は，旧水沢市北東に位置し，人口は3,764人であった[8]。その中に鋳物工場が密集する田茂山という地域がある。そこには140の世帯が生活し，その人口は，男子247人，女子263人の合計510人である。もちろん田茂山の住民が一人残らず鋳物業に従事しているわけではない。しかし，先に触れたように全鋳物工場の総従業員数は571人であることから，この地域に鋳物業関係者が多く住んでいることは想像がつく。

以上述べてきたように，この羽田地区の呼び名は変われども，そこは藩政期から鋳物を作り続けてきた地域なのである。次に，その鋳物製品の代表である鉄瓶製造について述べることにする。

３．南部鉄瓶の製造工程と技術の習得

南部鉄器の代表製品である鉄瓶は，おおまかには表１に示された13の工程によって製造され

ている[9]。すると職人は完成品をイメージし，製造のプロセスで起こることを予測しながら作業を原則一人でこなしているわけである。そこには，きわめて高度な手作りの熟練が必要である。このプロセスを見れば，鋳物職人とは，別の言い方をするなら「多能工」と呼んでも良いことがわかる。

表１　鉄瓶の製造工程

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
デザインを決める	木型の作成	鋳型作り（型挽き）	文様押しと肌打ち	鋳型の焼成	中子の作成	削り中子	鋳型のセット	鋳込み（注湯作業）	仕上げ作業	色取り作業	蓋，つまみ，口の作成	つるの製作

資料：水沢鋳物工業協同組合編（1990: 15-19）から作成

この製造工程の中で核心となるのが鋳型の製作であることは言うまでもない。それは砂を固めたもので，砂型という。砂型にも焼型と生型という２種類の材質があり，鉄瓶を鋳造する場合に焼型が用いられ，それは補修の上で繰り返し使うことができる。それに対して，生型は，機械によって自動化され，大量に製品を作るときに用いられる。そのため，生型は製品を取り出す際に崩されてしまう[10]。

次に行われる鋳造は，キュポラ（cupola）[11] または甑（こしき）という炉で溶融された鉄を砂型に流し込んで行われる。この溶かされた鉄は「湯」と呼び慣わされている。鋳物職人は，この鋳造の過程で鋳縮みや湯皺が出ないように目配りし，仕上げの際にはバリを取り，鋳肌を磨き，蓋やツルをつけて組み立てるわけである。この鉄瓶の文様や鋳肌については職人によって独特なものが工夫されている。また中子や鉄瓶ツルについては下請けとして，それのみを製作している工場もある。その場合は，組み立の際に鉄瓶本体と部品間の調節することも必要である。先に述べたように，南部鉄瓶を製造するには，そのすべての工程が経験豊富な一人の職人の手に掌握されている。このように南部鉄瓶を作る職人が，どのようにして技術を習得したかについて水沢出身で1975年に伝統工芸士に認定された及川鉄氏の例から考察することにする。

表２にその経歴を示した及川鉄氏は1911（明治44）年生まれであるから，昭和時代を生きた職人の具体例として考えるのに相応しい人物である。その生活史

表２　及川鉄氏の経歴

1911 年４月	出生
1926 年	鉄瓶製造の千田新吉に弟子入り
1933 年	八戸市の蒔田鋳金研究所に入所
1954 年	宝鉄堂鉄瓶工業創業
	水沢鋳物工業協同組合に加入
1975 年	伝統工芸士に認定される
1977 年	岩手県卓越技能者表彰を受ける
1979 年	労働大臣より卓越技能者表彰を受ける
1981 年	勲六等瑞宝章受章

資料：全国伝統工芸士会編集委員会編（1986: 550）から引用。なお，宝鉄堂創業年は毎日新聞社編（1979: 228）による。

を『東北の工匠』から要約することにする。それによると及川氏はもともと鋳物師の家系に生まれたが，四代女系が続いたため炉すらなくなっていた。小学校４年生の頃から近くの鋳物工場で鉄瓶の蓋の着色をして小遣いを稼いだ。14歳で高等小学校を卒業すると水沢市内の鋳物工場に弟子入りをした。初めは朝５時から夜遅くまで，子守や風呂炊きをすることが仕事であった。そして，後輩の弟子が入ってきて，ようやく鋳物の修業を始めることができるようになったという。及川氏は，この仕事がよほど性に合ったのか，３年で一人前になることができたが，一年間はお礼奉公をした。その後，八戸市の鋳物工場で修業を重ね，戦時中は県技手職業官として機械鋳物の製造を指導した。戦後，水沢に帰郷し鋳物工場に勤めた。その頃は，工場から「湯」を買って帰り，自宅で鉄瓶や花器を造っては，製品の半分を「湯代」として工場に納め，残りの半分を金物屋に売って生活を支えたという。そして，1954年に「宝鉄堂」を設立し念願の独立を果たした。それ以後，及川氏は専門家の目を見張らせるような作品を世に出していった。その及川氏は，精魂を込めて作り上げた作品もちょっと気に入らぬ点があると惜しげもなく炉に投げ捨てるという（毎日新聞社編，1979: 227-228）。

『水沢市史』には，徒弟制度について「実家に来るのは師匠から許される盆と正月の一年に二度しかない。近所に使いに来ても決して立ち寄ることはならぬ。家へ帰れるのは10年勤めて立派に一人前になってから帰れ」（小林晋一，1990: 585）という言葉が紹介されていることから，及川氏の場合，当時の「修業」と称される鋳物製造の技術を学ぶ３年間の徒弟生活は短い方だったと想像する。その後も及川氏は太平洋戦争の時期を挟んで複数の工場などで修業を続け，真に独立したのは弟子入りから28年が経過した43歳の時ということになる。

水沢鋳物に限らず，近代的な教育制度が未発達な時代の職業訓練は，徒弟制度を通じて行われていた。『水沢市史』によって補足すると，羽田町における鋳物の徒弟は「夏は栗ノ瀬部落の八雲天王の祭など，秋は水沢の駒形神社の祭に五拾銭銀貨一枚貰う位」（小林晋一，1990: 584）だったというから，祭りの時に小遣いを貰う程度で，報酬や労働時間など考えずに住み込みで働き，見よう見真似で技術を覚えたわけである。それは「昭和十六年の頃即ち太平洋戦争前まで続」（小林晋一，1990: 585）いたとされる。

このようにして経験に基づいて覚える勘やコツは，職業訓練として広く一般に開放できる性質ではないから，学校において体系づけられた課程を踏んで行われるのではなく，一子相伝によるか，徒弟の集団の中で代々伝えていくことになる。狭い範囲の人間関係の中で技術を次の世代に伝えようとすると，直系以外の者は，その伝承においてどの師匠に教わった弟子であるという系譜関係が生まれるということは不自然なことではない。そこで次に，社会学における系譜関係の研究を概観することにする。

４．水沢鋳物業における職人の系譜関係

４－１　同族的系譜関係の研究史

現在，家系図というと，それは個人の財産の継承関係を理解するのに便利なものと考えられるが，そもそも本家，分家といったイエとイエとの関係もその中に含まれている。そこに示さ

れる系譜関係とは，わが国の社会学では同族団の研究として特別の位置を占めている。同族団の研究は，有賀喜左衛門の『日本家族制度と小作制度』（有賀，1943）を嚆矢として，及川宏，喜多野清一，中野卓らによって発展継承されてきた。これは欧米の理論に頼らないで形成された，わが国の社会学における貴重な成果である。

同族団とは，中野卓によれば，「本家を中心にその系譜の本末を相互に認め合うことによって，上下的，支配従属的な関係で結合している家々の連合体」（中野，1978: 54）のことである。そして家の系譜とは，「個々の家それ自身が嫡系（直系）の線に沿って連続することを意味するとともに，また庶系（傍系）によって分岐した家々と，その本元の家とが連関する関係を意味している」（中野，1978: 54）。この系譜関係は，同族団の中軸をなすものであるが，系譜関係が存在するだけで同族団であるかというと，そうではなく「地縁を条件になりたつ生活共同を抜きにして系譜関係があるわけではない」（中野，1978: 39）ともされる。要約して，同族団の結合原理は「系譜関係」で，それを支えている条件が「日常的生活関係」「地縁関係」なのである（中野，1978: 39）。

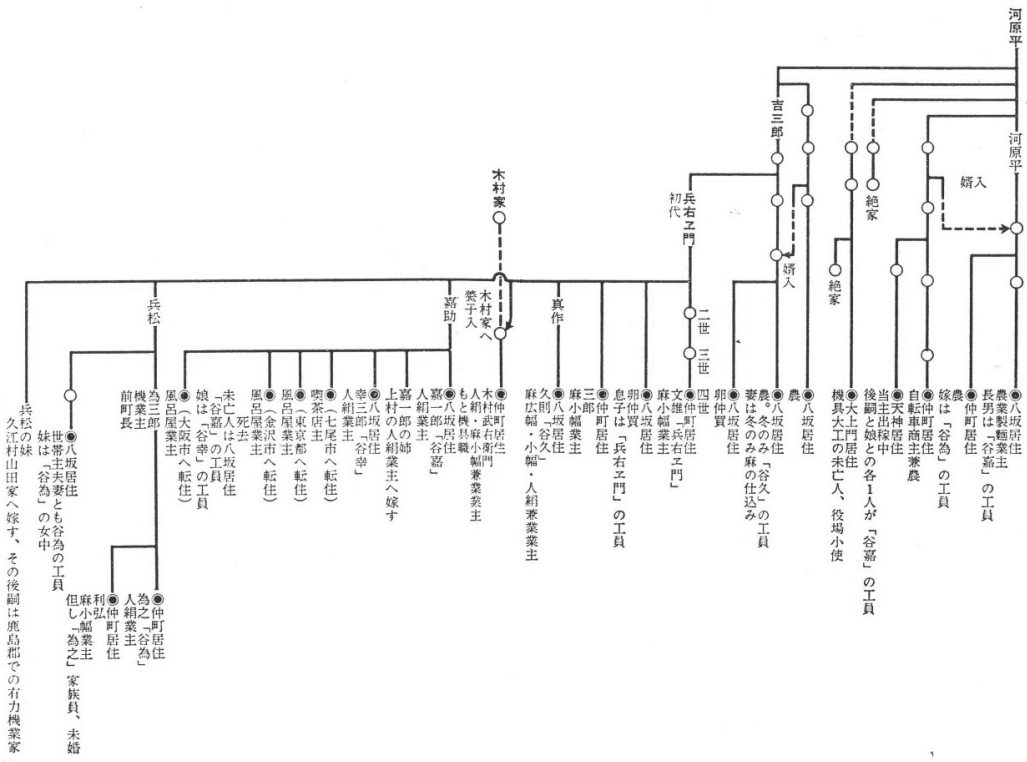
それは，後に中野卓が述べたように「日本社会の構造を解明する重要な手掛り」（中野，1974: 300）であり，太平洋戦争前からわが国の社会学者は各地の村落で様々な事例を調査研究した。ところが本家・分家の系譜関係が同族団の要素ならば，それに類似した関係は，呼び方は違えど日本に存在していたのである。ゆえに同族団研究の考え方や方法は農業を生業とする村落においてだけでなく，まず中野卓が『商家同族団の研究』において暖簾の同一による家々の系譜的な連続に応用しただけでなく（中野，1978），さらに工業の分析にも応用可能なのである。

そこで，尾高邦雄らによって1947年～50年に調査された埼玉県川口市の「鋳物の町」調査（尾高編，1956）と，1953～1954年に行われた九学会連合の能登調査（武田・中野・外木・安食・間，1955: 433-450）は同族団理論を視野に入れたものだった。それが後年，産業社会学の研究史を振り返った稲上毅から「国産の同族理論が援用駆使された」（稲上，1987: 7）と高く評価されている。特に，工業における家の系譜関係は，川口市の調査よりも石川県鹿島郡能登部町の調査に明確に示されている。

それは図5に示したように，能登部町においては「マツイ」が同族団と同じ意味を持ち，その内外で「ヨボシオヤ・コ」[12] という擬制的親子関係が，機業とこの地域の社会構造の基礎に横たわっていることを明らかにしたものである（中野，［1955］1978）。中野の調査によると，能登部町の機業は，人絹・絹・麻広幅・麻小幅の4種類で，前3者の工場が力織機を据え付けているのに対して，麻小幅の工場は織りの直前か織り上げてきたものの仕上げ販売するもので，織元を意味する「布屋」と呼ばれるふさわしい。その傘下の織機は出機農家に分散している（中野，［1955］1978: 38-39）。

次に述べる「谷マツイ」は，能登部町における1952年度の生産反数の78％を占めるといわれ，それに属する布屋が機業界をリードしている。図5に見られるように谷マツイは，本家兵右衛門家を中心に，分家兵松，分家嘉一郎はそれぞれが有力な機業主であり，「兵右衛門のマツイ」としての団結を保っている。そして有力機業主であるため，マツイ内外から「ヨボシオ

ヤ」を頼まれるため，マツイの外にも「ヨボシゴ」を持っている。この谷マツイの中から前町長が選出されていることからも，マツイは選挙地盤としての機能を現しているわけである（中野，［1955］1978: 44-50）。


河原平
吉三郎
河原平
婿入
絶家
絶家
婿入
兵右ヱ門
初代
木村家
木村家へ養子入
嘉助
真作
兵松
二世
三世
四世
為三郎
機業主
前町長
世帯主夫妻とも谷為の工員
妹は「谷為」の女中
兵松の妹
久江村山田家へ嫁す、その後嗣は鹿島郡での有力機業家
為之「谷為」
人絹業主
利小弘麻小幅業主
但し「為之」家族員、未婚
仲町居住
風呂屋業主
娘は「谷幸」の工員
未亡人は八坂居住
風呂屋業主
風呂屋業主
喫茶店主
人絹業主
上村人の絹業主へ嫁す
嘉一郎の姉
人絹業主
嘉一郎「谷嘉」
人絹兼業主
麻小幅兼業主
久則「谷久」
麻広幅・小幅・人絹兼業主
麻小幅業主
三郎「谷幸」
麻小幅業主
息子は「兵右ヱ門」の工員
麻小幅業主
妻は冬のみ麻の仕込み
冬のみ「谷久」の工員
麻小幅業主
長男は「谷嘉」の工員
嫁は「谷為」の工員
後嗣と娘との各1人が「谷嘉」の工員
機具大工の未亡人、役場小使
大上門居住
農製麺業主
自転車商主兼農
天神居住
仲町居住
八坂居住
八坂居住
八坂

系譜をたどってみることにする。

郷土史家である小林晋一の『水沢鋳物発達史考』によると，水田家の始祖は天明年間から農業の傍ら鋳物職人をしていた。幕末の頃一時閉鎖されたが，四代周吉が嘉永５年に鋳物業を復興させた。仙台藩から苗字帯刀を許され，慶応元年から明治２年まで肝煎を，ついで明治８年まで戸長をつとめた。五代和吉は明治25年から，羽田村村長，明治29年から県会議員，明治31年から郡会議員および議長をつとめた。六代和吉も郡会議員，羽田村長を務め，産業功労者として表彰された。七代周喜司は1937年に44歳で亡くなった。最後に正治は，1938年に合資会社としての水田鋳造所の初代社長に就任した。戦時の難局を乗り越え，1955年から水沢市の市会議員，1959年には市議会議員議長を務めた（小林，1971a: 222-227）。

以上のように水田家の本家分家の系譜からは，鋳造所の経営を同族の内で行っていることだけでなく，水田家代々は家業の鋳物業を営みながら藩政期には羽田の旧家として存立し，明治維新以後，少なくとも昭和30年代に至るまで名望家として地元の政治・行政にも関わった家であることがわかる。

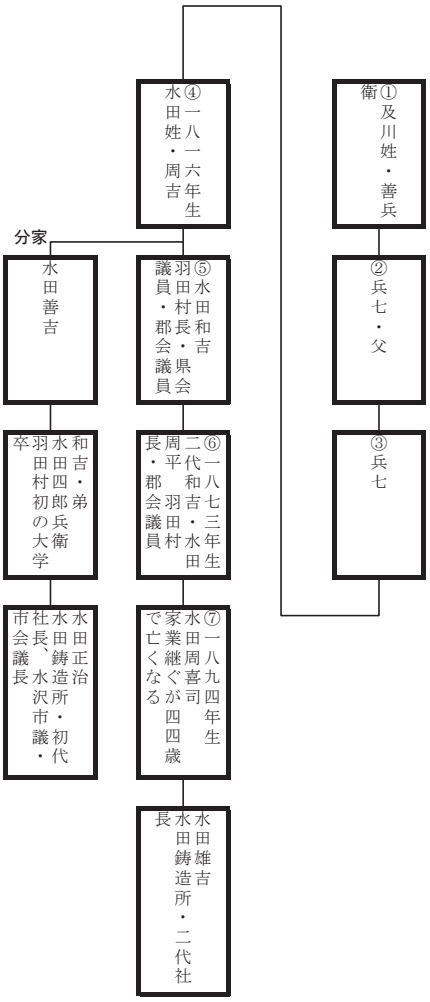


図６　水田家の系譜
資料：小林（1971a: 222-227）から作成
○内の数字は何代目であるかを示す

これは，伝統産業の存する地域においては，事業所の系譜関係も同族的系譜関係と無関係ではないことを示す好例である。また見方を変えれば同族的な地域権力構造の分析にもなることは前出の石川県能登部町の事例と共通している。

４－３　技術の系譜関係と師弟関係の系譜

そこで本研究で付け加えたいことは，工業における同族的系譜を論ずる場合には，職人の親子の系譜だけでなく，技術の系譜が存在することである。親子関係と技術の系譜をあわせて具体化したものが師弟関係の系譜である。

本研究の対象である水沢鋳物には，すでに郷土史研究家の小林晋一による師弟関係の系譜が存在していた（小林，1971b: 194-201）。しかし，その内容は必ずしも十分なものでなかった

ため，伝統産業会館を1986年に建設した際に内容整備委員長として千田泰司氏が，さらに一世代上の古老に聴き取り15系統の師弟系図を完成させた。千田氏は，1929年生まれで日新堂という鋳物工場を経営している人物である。その師弟系図は，市内の伝統産業会館に掲示されている。また市販されている『キュポラ・浪漫』には横書きに直されて掲載されている（水沢鋳物工業協同組合編，1990: 35-42）。ところが，伝統産業会館にも，『キュポラ・浪漫』にも系図に関して，その見方についての説明がない。過日，師弟系図を作成した千田泰司氏にインタビューすることができたので，師弟系図の見方について以下に紹介することにする。

> まず千田氏は「なにせ佐藤とか多いでしょ。佐藤全部とか，及川全部が親戚だと思われると困るからねぇ。それで分けたがいいと思って。直系の人……直系と血族と他人とを分けたんです。いまだったらえかったなと思います」[13] と師弟系図作成の理由を述べた。

その師弟系図から15系統のうち最大規模の水田鋳造所と及源鋳造に連なる系譜を図７と図８として示すことにする。確かに図７の水田鋳造所に連なる系譜を見ると，水田系にもかかわらず及川姓が何人も見られるので，同族だけの系譜ではないことがわかる。そして先に図６としてみた水田家の系譜は，図７によるとさらに横に広がり，多数の血縁者以外の職人が含まれていることがわかる。次に図８の及源鋳造に連なる系譜を見ると，及勘鋳造所や及春鋳造所といった鋳造所名の屋号に「及」を冠したものが見られる。及源系の一部ではあるが，その象徴する文字を継いでいることがわかる。

この水田系と及源系の関係について，前出『南部鉄瓶工』には，「この地では水田と云う徳川末期から数代続く鋳造業者が，問屋，販売者，資本家，財閥を兼ねている。一方それへ対抗する及源派がある。田茂山部落の鉄瓶製造業者達は，この二派に属して，頭領の争いについて抗争してきていた。水田派と及源派とは，明治以前から勢力争いをしていた。水田と及源と共に，自分の家では鍋釜の鋳造をやり，後の小工業者は鉄瓶を造っていた。鉄瓶生産者達は，各各従属する水田と及源とから，生産材料を買込み，製品をそこに持っていって買上げて貰っていた。二つの資本家達は，従属する鉄瓶業者達が自分の家の徒弟であつたために，いつも自分達の利益を擁護するためには，従属する者達を譲歩させていた」（中本，1938: 29-30）と描き出されている。

以上のことから，戦前の水沢鋳物業者の間では，親方―徒弟の関係が，その上部で及源系と水田系に分かれて連なり生産と販売が行われていたと推測することができる。また一部であるが，象徴的に屋号に一文字を継承している工場もある。すると，これは先に述べたように地縁の範囲で，系譜関係を有して，生産と販売に上下関係・支配関係があったわけであるから，暫定的には鋳物業の「同族団」が存在していたに他ならないと考える。こうした系譜による選別は，1996～1997年に水沢鋳物を調査した桑原敬一によると，「現在においてはその系譜の別は問わな」（桑原，1998: 25）くなったという。

次に水沢鋳物の系譜に独特な非血縁の弟子も含めた系譜のあり方について述べる。

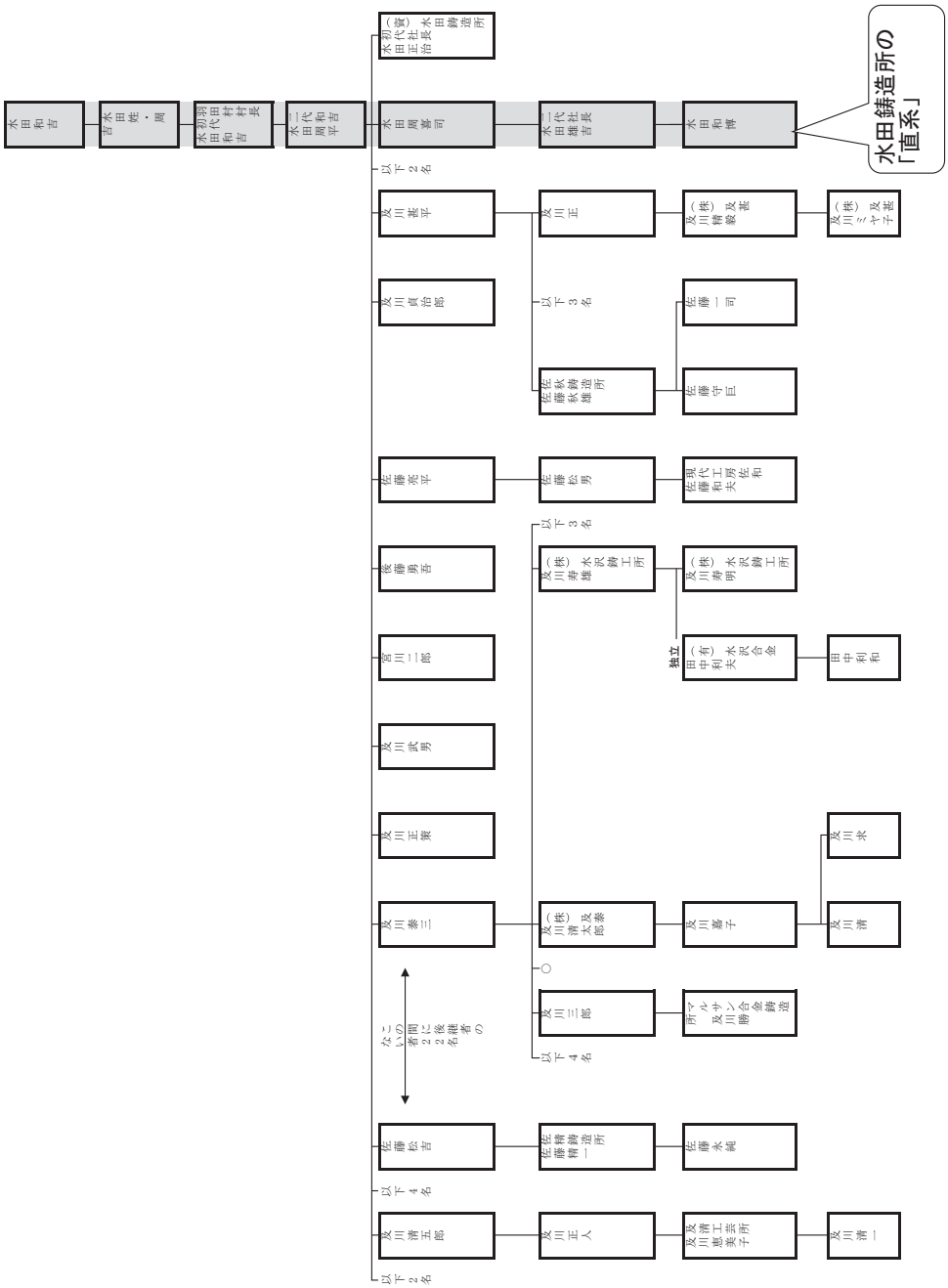


図7 水田鋳造所に連なる系譜
資料：千田泰司（1990:37）の一部を抜粋し，加筆して作成。

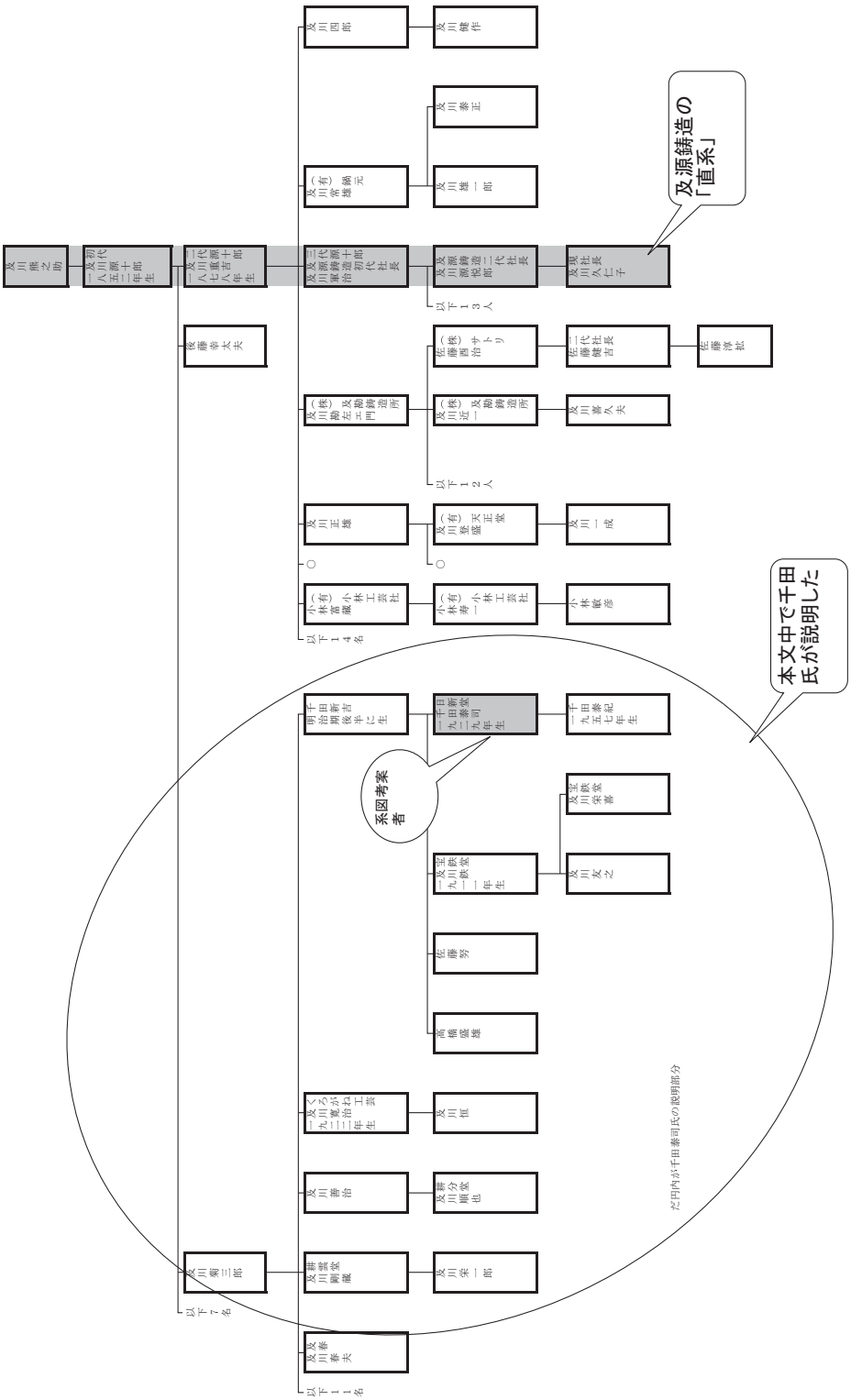


図 8　及源鋳造(株)に連なる系譜
資料：千田泰司（1990:39）の一部を抜粋し，加筆して作成。

さらに千田氏は図８の系譜を示して，

「私のところもね，及川菊三郎からしてね，この剛蔵は菊三郎の息子。善治も二番目の息子。寛治が三番目の息子。親父が……。だからこっち（千田新吉の家系のこと）は，私が直系で，息子の泰紀（やすのり）が直系。この二人，及川鉄，佐藤努。この人達は他人だったのが，親父が面倒見た」[14] ということを明らかにした。

すると図８によると，水沢鋳物の系譜は直系を縦軸にして，右側に血縁者，左側に血縁のない弟子が示されていることになる。この系譜の作り方は通常とは異なるので，その意味について後に検討する。

さらに前出の伝統工芸士である及川鉄氏は，千田氏の父である新吉氏にいわば「兄弟子」として学んだわけである。このような事情は，地元の方々にとっては周知のことだと思われるが，次代への伝承には説明を残すことが必要である。また千田氏は，徒弟としての学びについても以下のように述べた。

「徒弟制度に入るとね，弟子にはいると，『ああだこうだ』と手を取っては教えられないんですよ。誰にも。仕事（すごと）は盗めっつう感じ」。「見て。ああやるんだからこうだって，自分（ずぶん）でやると経験になって，自分で改良していくこともあるわけ」。「自分の親父にも私も手を取って教えられたことないです。見ててね，自分の親父にもね……」[15]。

「一旦弟子になりますと変わらないでね。そこだいたい兵隊検査20歳までが弟子の期間でね。徴兵制度があったもんだから，兵隊検査のときに弟子あがりということになるわけです。弟子を離れる，一つの一人前の職人として扱われるんですよ。そすと，よそに行っても給料をもらえるわけですよ。徒弟制度のときは給料は小遣いだけですよ」。「丁稚と同じ感覚ですよ。だから盆の16日とかね，正月の三が日ぐらい。そいで各部落というか地域の有名な神社のお祭りがあるときは休みになるね。昔の『時節（ときせつ）』と書いて節句ね，ときせつは桃の節句，端午の節句とか」[16]。

他の伝統産業同様に徒弟とは，①その学びは，手取り足取り教えられるものではなく，見よう見まねで学んでいくこと。②休みは盆と正月程度で，給料ではなく小遣いを貰う程度だったことが改めて述べられた。この点については，前出『南部鉄瓶工』に，徒弟が許しを得て夜７時頃から９過ぎまで「扶持（ほまち）」と呼ばれる親方に収めないで済む鉄瓶を作る姿が描かれていることからも裏付けられる。この扶持ちは，鋳型作りから磨き上げるまで，すべて徒弟ひとりで行うため，徒弟の技術を練成することができる。その製品は親方に収めなで販売することができることから，徒弟の唯一の収入となるものであった（中本，1938: 148）。

さらに，水沢鋳物に関しては，次のように「見て学ぶ」ということが師匠や兄弟子の間に限らず許されたという新しい証言が得られた。

「及川鉄さんも当時は銅器だったの。親父が鉄に変わったもんだから，この辺は銅器がかなりあったんですわ。鉄やる前は。うん。最後にここで銅器を造ったのは水沢……寺にある梵鐘が最後かな。ここで銅器つくったのは。それでね，親父がよその工場（こうば）に行って，もうこれどうするんだわからなくなったら，もう仕事はほっぽり出して，よその工場を見に行ったよ。黙って。もう鼻先にくらい側で，つきっきりで見てたよって言ってた」。「よそでは，『ここからは事務所の許可を得てからとか』ですよ。ここはそうじゃないです。オーイやってるかって，直接ね」。「黙って見て，あんだったら俺もやれるわちゅう感じね。けっこうみんなふんでんのよ」[17]。

水沢鋳物では，このように，よその工場に黙って入って見て良いという，一種の「技術交流」が暗黙の中にあったということになる。これが技術の伝承を縦の血縁者だけに限らなかった水沢鋳物の系譜が横に広がりを持った一つの理由であると考える。

そしてこのことから，水沢の鋳物職人の系譜は，同族団というよりも同族的関係であると理解する。この一種の技術交流は，同族的関係で技術を閉ざすより，開放していたことを意味するからである。

5. まとめと課題

以上に述べてきたことにより，水沢鋳物業における師匠と弟子の関係を示す系譜は，太平洋戦争前には鋳物業「同族団」に近い関係が存在していたことを示すものであると結論づける[18]。しかし，水沢鋳物の系譜は，1960年代に郷土史家によって作られたものが，1986年に拡充されて整備されたものであり当時から存在していたものではないこと。他の工場の仕事をわりと自由に見ることができたことから，職人の間で技術を閉ざしていないことなどから，それは有賀喜左衛門の研究に発する，地縁を条件にして，抜き差しならない生活共同の関係を持つ「同族団」というよりも，鋳物職人の間での同族的関係が今日まで維持されていたと理解する方がより妥当であると考える。

同族的な系譜関係は維持されたが，「鋳物業同族団」が，継続して存続しなかった理由は，1935年に岩手南部鋳造工業組合の設立されたことによって原材料の共同購入と製品の共同販売が行われはじめたこと[18]，日中の戦争に際して1938年に鉄瓶製造が禁止されたこと，1941年頃に徒弟制度が廃止されたこと，戦後は1954年に共同購入と共同販売のための水沢鋳物工業協同組合が設立[19]されたことなどが複合的に関連したことだと考える。

まとめとして前節で得た千田氏のインタビュー内容をモデル化し，三人の兄弟と，二人の弟子がいる場合を図９として作成した。こうした縦と横に広がる師弟関係は，図８の及源鋳造の例に見られるように，現実に存在する。

それを見ると，直系者が縦一列に連なるのは通常の家系図と同じであるが，血縁者を右側の傍系に向かう形で並べていくことは，通常の家系図ではありえないが，水沢鋳物業の師弟系図

の場合はこのようにして区別しているわけである。そして，特筆すべきことは血縁のない弟子を左側の傍系に含めて師弟系図を作成していることである。

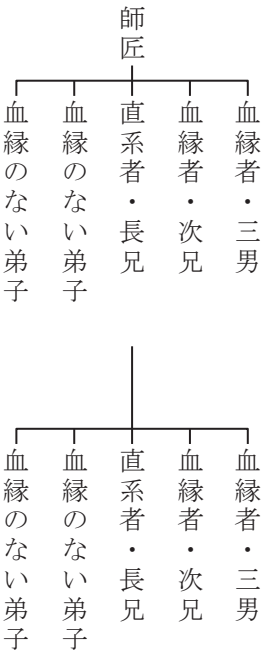


図９　血縁関係と師弟関係をあわせた水沢鋳物業の系譜モデル
資料：千田泰司氏からききとって著者作成

図10　男系の家系図
資料：著者作成

男性を中心とした一般的な家系図を図10に示した。これと比較すると図９は，血縁者の序列が右に伸びていくためわかりにくいという欠点がある。しかし，職人の技術の伝承は，血縁関係だけには限らないので，傍系の左側に伸びていく非血縁の系譜というのは一つの工夫である。この新たな発見を「水沢鋳物業の系譜モデル」と名づけることにする。

今後の課題としては，まず盛岡鋳物をはじめとする他の伝統産業における職人の系譜を探して，水沢鋳物業の場合と比較研究することが，工業における同族団理論の補強し，その有効性を示すことである。

さらに，江戸時代に大火にあった水沢市は日高火防祭（ひだかひぶせまつり）を毎年４月29日に本祭を行っていることはよく知られている。それとは別に羽田町でも火防祭を毎年３月最終日曜日に開催している。その際に厄年連として巳雄神（みゆうじん，25歳），櫻酉會（おうこうかい，33歳），耀子会（ようしかい，42歳），白蛇会（はくじゃかい，49歳），亥子の会（いねのかい，55歳），次年度厄年と前年度厄年の会も設けられている[20)]。こうした年齢別の組織がいつごろ設けられ，また鋳物職人との関連はいかなるものであるかは調査の課題であると考えている。

付記

本論文をまとめるにあたり，現地に紹介していただいた桑原敬一氏，およびインタビューに応じてくださった千田泰司氏にまず感謝を申し上げる。そして，本研究は，2013年10月13日（日）に開催された第86回日本社会学会大会報告（於：慶応義塾大学三田キャンパス）「家族」第３部会にて報告した「鋳物業同族団の技術的系譜関係―岩手県奥州市における水沢鋳物の事例」に加筆したものである。司会の先生をはじめとして，当日に活発なご意見を下さった皆様にも感謝する。また論文として投稿した際の匿名の査読者にもあわせて感謝する。

注

1）伝統工芸士とは，1974年に制定された「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」（伝産法）に基づき，高度な伝統技術・技法などを有する経験年数20年以上の技術者のうち，産地ごとに実施する認定試験に合格し，認定中央委員会における審査を経て「伝統工芸士」として認定された者のことである（全国伝統工芸士会編集委員会編，1986: 無ページ）。

2）岩手県水沢市は2006年２月20日に市町村合併により奥州市となった。しかし，現在の奥州市域に関連して論ずるわけではないので，以後は旧水沢市と称する。余談となるが，水沢市は，わが国の同族団研究に大きく貢献した及川宏の本籍地である江刺郡岩谷堂町（及川，1967: 248）に隣接し，及川の研究した旧仙台領増沢村にも隣接する。

3）中本たか子の『南部鐵瓶工』には，北鵜ノ木の理一さん（佐藤理一）として描かれる岩手南部鋳造工業組合理事長は（中本，1938: 49），『水沢市史』によると，それは佐藤憘一氏のことに他ならない。佐藤憘一氏は1891年，羽田町に生まれで水沢農学校を経て盛岡農業学校養蚕科を卒業して，蚕業界の指導的地位にあった。戦後は公選初の首長選に推されて羽田村長に当選した。羽田村は二度の水害，大火に見舞われた。佐藤村長は再選し，その復旧や町村合併にも尽力したが1953年に亡くなった（小林晋一，1990: 1506-1508）。また岩手南部鋳造工業組合の監事として千田新吉氏，職員の一人に及川鉄氏の名前がある（小林晋一，1985: 525-527）。こうした過去の歴史上の人物と思われた人々も，本研究の端々に登場することに，改めて驚かされる。

4）水沢鋳物工業協同組合の HP「水沢鋳物の売り上げ状況」（http://www.ginga.or.jp/~imono/txt/shoukai.htm）から（2004年３月23日および2018年９月17日閲覧）。

5）水沢鋳物工業協同組合の HP「水沢鋳物の売り上げ状況」（http://www.ginga.or.jp/~imono/txt/shoukai.htm）から（2004年３月23日および2018年９月17日閲覧）。

6）水沢鋳物工業協同組合の HP「従業員状況」（http://www.ginga.or.jp/~imono/txt/shoukai.htm）から（2004年３月23日および2018年９月17日閲覧）。

7）旧水沢市の HP「水沢市の統計地区別人口・世帯数」（http://www.city.mizusawa.iwate.jp/htm/soshiki/soumu/toukei/3.htm）から（2004年４月６日閲覧）。

8）旧水沢市の HP「水沢市の統計地区別人口・世帯数」（http://www.city.mizusawa.iwate.jp/htm/soshiki/soumu/toukei/3.htm）から（2004年４月６日閲覧）。

9）及川鉄氏の場合は，図案づくりから仕上げまで60工程を超えるという（毎日新聞社編，1979: 228）。

10）より精密でより大量に生産することが必要な製品には，金属の型，すなわち金型を用いて製造が行われることになる。砂型も金型も鋳造して製品をつくる基本は同じである。型を用いること。焼型にみられるように，繰り返し同じ型によって，同じ大きさで同じ色の製品をつくるということは，漆器あるいは削りだしの木製品，窯元のつくる陶器や磁器，（ニラギと呼ばれる）刀工が鍛える日本刀のような一品ものをつくる場合とは，生産に対する考え方の転換がある。要約して鋳物の技術は，一品ものの性格を色濃く持つが，タタラ製鉄の時代からある程度の大量生産を可能

にする技術であった。

11）キューポラともいう。

12）昭和30年代の調査当時，能登半島の付け根に近い口能登では，「ヨボシオヤ・ヨボシゴ」の習俗が未だ盛んであった。民俗学者の長岡博男によると，それは年頃の男女が村の有力者を頼んで，「親子の契の杯」を交わし，自後一生の間の親代わり，相談相手になって貰うことである（長岡，1975: 39）。

13）日新堂鋳造所を経営する千田泰司氏へ質問を構造化しない聞き取りを行った（2001年10月11日）。さらに千田氏によると，こうした系譜関係を明らかにしたきっかけは「それで伝統産業会館を建てるときに，あのときどういうわけだか，私が内容整備委員長にさせられたわけだからね。そんじゃ何か書かなきゃダメだと思って。これ，系図を今のうちに書いておかなければ，あと誰も分かる人がいなくなるから，と思って，年取った人に聞き取りにいったわけだ。全部。私も知っている範囲内では書きましたが，親父に聞いてあったからね。分からないところがあると，あの人はまだ生きてるなというと，そこへ行ってみんな聞いて，及源さんの会長（及川軍治）さんにも聞きましたよ」という（2001年10月11日）。

14）日新堂鋳造所を経営する千田泰司氏からの聞き取り（2001年10月11日）。

15）日新堂鋳造所を経営する千田泰司氏からの聞き取り（2001年10月11日）。

16）日新堂鋳造所を経営する千田泰司氏からの聞き取り（2001年10月11日）。

17）日新堂鋳造所を経営する千田泰司氏からの聞き取り（2001年10月11日）。

18）岩手南部鋳造工業組合は，1941年９月に有限会社岩手鋳機工業協会に改組し，軍需品生産にあたったが，戦後は平和産業に復してミシン等の製造に切り替えた（小林晋一，1990: 586）。

19）桑原敬一の研究によると，組合員が生産する製品の共同販売は，工芸品の売り上げの約10%にすぎない（桑原，1998: 86）。

20）「羽田町火防祭イベントスケジュール」（2013年３月31日）。

引用文献

有賀喜左衛門，1943，『日本家族制度と小作制度』河出書房.

池田雅美，1949，「陸中田茂山の調査覚え書」『社会地理』No.14（1949年７月号）12-15.

池田雅美，1978，「いものの町　水沢」板倉勝高編『地場産業の町（上）』古今書院 : 25-37.

稲上毅，1987，「概説　日本の社会学　産業・労働」稲上毅・川喜多喬編『リーディングス日本の社会学（９）産業・労働』東京大学出版会 : 3-23.

岩本由輝，2002，「南部鉄器」『東北地域産業史――伝統文化を背景に』刀水書房 : 123-148.

及川宏，1967，『同族組織と村落生活』未来社.

尾高邦雄編，1956，『鑄物の町――産業社會學的研究』有斐閣.

桑原敬一，1998，「水沢鋳物工業の展開と変容――その存続した要因と今後の展望」未公刊修士論文（専修大学大学院文学研究科社会学専攻提出）.

小林晋一，1971a，『水沢鋳物発展史考（上巻）』小林晋一発行.

小林晋一，1971b，『水沢鋳物発展史考（下巻）』小林晋一発行.

小林晋一，1982，「田茂山鋳物」水沢市史編纂委員会編『水沢市史（３）近世下』水沢市史刊行会 : 73-151.

小林晋一，1985，「羽田の鋳物業」水沢市史編纂委員会編『水沢市史（４）近代Ⅰ』水沢市史刊行会 : 493-541.

小林晋一，1990，「鋳物業」水沢市史編纂委員会編『水沢市史（５）近代Ⅱ』水沢市史刊行会 : 582-661.

全国伝統工芸士会編集委員会編，1986，『伝統工芸士名鑑』ふたば書房.

武田良三・中野卓・外木典夫・安食正夫・間宏，1955,「『織物の町』能登部――その社会構造」九学会連合能登調査委員会編『能登――自然・文化・社会』平凡社 : 418-450.
千田泰司，1990,「子弟系図及び事業所の推移」水沢鋳物工業協同組合編『南部鉄器のふるさとキュポラ・浪漫』水沢鋳物協同組合 : 35-42.
長岡博男，1975,「能登の『よぼしご』」『加賀能登の生活と民俗』開明堂 : 39-44.
中野卓，［1955］1978,「田舎町の機業と同族組織――織物の町，能登部における機業の社会構造」『下請工業の同族と親方子方――「高度成長期」前におけるその存在形態』御茶の水書房 : 27-69.
中野卓，1956,「事業主の系譜と性格」尾高邦雄編『鑄物の町―産業社會學的研究』有斐閣 : 65-107.
中野卓，［1974］1995,「同族」フランク・B・ギブニー編『ブリタニカ国際大百科事典（13)』TBSブリタニカ : 300-303.
中野卓，1978,『商家同族団の研究（第二版）――暖簾をめぐる家連合の研究（上)』未来社.
中本たか子，［1938］1999,『南部鐵瓶工』新潮社（復刻版は尾形明子監修，近代女性作家精選集（16)，ゆまに書房).
南部鉄器協同組合編，1990,『南部鉄器――その美と技』岩手県南部鉄器協同組合連合会.
野添憲治，1986,「みちのくの鉱脈 4 南部鉄器鋳物師・及川鉄」『思想の科学』第 7 次75号通巻412号 : 182-191.
初沢敏生，2002,「岩手県水沢鋳物業の特性」『福島大学地域創造』第13巻第 2 号 : 68-76.
毎日新聞社編，1979,『東北の工匠』毎日新聞社.
水沢鋳物工業協同組合編，1990,『南部鉄器のふるさとキュポラ・浪漫』水沢鋳物協同組合
水沢市企画課編，1996,『水沢市勢要覧（平成 8 年度）資料編』水沢市.
山本俊一郎，2006,「水沢鋳物産地における製品転換と企業の存立形態」『季刊地理学』vol.58. No.1: 1-18.

Abstract

The Genealogical Relation Between Foundry Craftsmen: Case Study of Mizusawa Foundry in Oshu City, Iwate Prefecture

Toshiyuki TAKAGI

There are two major districts that produce Nambu ironware in Morioka and Mizusawa, Iwate Prefecture. The subject of research is Mizusawa foundry where a number of casting manufacturers exist in a small district. There are roughly thirteen manufacturing processes for a Nambu iron kettle. A foundry craftsman that may be involved in all of these processes is so to speak a “cross-trained worker”. Therefore, it takes considerably a long time to learn skills in a sort of mentoring relationship.

There is a genealogical relation between foundry craftsmen who manufacture Nambu ironware. The genealogical relation between families in a village and merchant's families has a special place in the Japanese sociology for a study of kinship family that is one of the Japanese social structures. In this study, a genealogical relation based on a craftsmanship in Mizusawa foundry is discussed as a kinship relation in an industry, which has never been covered before.